

立つ鳥後を濁して

—A Tale of a Tub と Inigo Jones と二つの court—*

小 澤 博

は じ め に

『ケンブリッジ必携 ベン・ジョンソン』の中で劇作家ジョンソン (Ben Jonson) の批評史を概括したロバート C・エヴァンズ (Robert C. Evans) は、後期の3作品『新聞商会 (The Staple of News)』、『磁石夫人 (The Magnetic Lady)』、『たわいない話 (A Tale of a Tub)』(以後 *Tub* と略記) について、これらは「その出来映えを云々する以前に、そもそも論評に値しない駄作として一笑に付されてきた」とし、わずか3行の言及でそっけなく片付けている (Evans 189)。(1) なるほど、ジョンソンが残した晩年の劇作品を「毫碌の産物 (dotages)」と切り捨てたのは、他ならぬかのジョン・ドライデンだが (Dryden 90)、それにしても、エヴァンズの語る批評史は、アン・バートン (Anne Barton) による後期作品の再評価、分けても、ジョンソンとイニゴー・ジョーンズ (Inigo Jones) の確執を伝えるテキストとして、その資料的価値しか認められることのなかった *Tub* を、古き良き時代を懐かしむ共同体のドラマ、過ぎ去ったエリザベスの治世に還っていくノスタルジーのドラマと位置づけたバートンによる読み直しを (Barton 321-37)、いささか不用意に見過ごしてはいないだろうか。ケンブリッジ全集版 *Tub* の編者ピーター・ハッペ (Peter Happé) が指摘するように、バートンの論考は政治社会史的文脈を踏まえた *Tub* の再読を促し、ハッペ自身による同作品への「序論」に結実しているのである (Happé; Butler, “Stuart Politics”; Sanders

164-87; Marcus 106-39)。歴史的視点からの新たな *Tub* 論の試みは、駄作と見なされ、看過されてきた本作の深層に、当代の社会情勢を炙り出す存外大きなテーマが書き込まれていることを明らかにするもので、80年代以降盛んになった政治批評と連動しつつ、従来の *Tub* 論の欠落を補うものであった。だが、一方で、そうした新たな作品解釈は、ジョンソンをして「たわいない話」とも「タブさんの話」とも読める珍奇な笑劇を書かしめたそもそもの動機、個人的かつ私的な事情——イニゴー・ジョーンズに対する明け透けにしてい、癒しがたく、根深い私憤——を議論の埒外に置くことで、作品本来の内実から遠ざかってしまった感がある。ジョンソンはこの最後の芝居で、今や国王チャールズの寵児となり、「英国建築総監督官 (Surveyor of the King's Works)」にまで成り上がったイニゴー・ジョーンズを、桶屋、建具屋、大工と扱き下ろし、恨み辛みの丈を晴らして、劇場を去った。*Tub* は何にも増してエゴの芝居なのである。

拙論では、以下、ジョンソンとイニゴー・ジョーンズの確執を中心に、*Tub* に書き込まれた諷刺のレトリックを、私憤のドラマツルギーとして考察してみたい。

1 私 憤

宮廷仮面劇の共同制作者であったジョンソンとイニゴー・ジョーンズが、〈作者 (inventor/author)〉の主導権を巡って衝突していたことは周知の事実だが (Donaldson 202-03, 422-25; Leapman 207-09, 216-17, 246-57)、その顛末を物語る 1 通の書簡が残っている。

... your ink was too thick with gall, else it could not have so bespattered and shaken the reputation of a royal architect; for reputation, you know, is like a fair structure long time a-rearing but quickly ruined. If your spirit will not let you retract, yet you shall do well to repress any more copies of the satire; for to deal plainly with you, you

have lost some ground at court by it, and as I hear from a good hand, the King, who hath so great a judgement in poetry as in all other things, is not well pleased therewith. (qtd. Donaldson 423)

手紙は「あなたのインクは胆汁（苦み、憎悪）が少し濃すぎました」と切り出し、王の不興を買っていることに言及しつつ、件の諷刺詩はもうこれ以上ばらまかない方がよいと論している。友人のジェイムズ・ハウエル（James Howell）がジョンソンに宛てたものだが、この書簡には少々入り組んだ背景がある。ジョンソンとイニゴー・ジョーンズは、1631年、宮廷仮面劇『愛の勝利のカリポリス凱旋（*Love's Triumph through Callipolis*）』を共作したが、これが出版されるや、タイトルページに印刷された「作者（Inuentors）」巡って両者の確執が再燃し、決別して、以後、ジョンソンは再び宮廷仮面劇の制作に関わることはなかった（Knowles 323）。収まらぬジョンソンは憤怒の思いを「イニゴー・ジョーンズへの忠告（An Expostulation with Inigo Jones）」と題する露骨な諷刺詩にしたため、英国建築総監督官として、仮面劇の「作者」として、宮廷の中枢に留まることになる怨敵を「30ポンドの借金から這い出てきた成り上がり者・・・似非ウィトルウィウスを振りかざし、人をこけ威す大先生・・・とつととくたばり、灰にならんことを・・・」（1-3, 7-8, 102行）と痛罵するが、余憤収まらず、「似非公爵イニゴーへ——付録——（To Inigo, Marquis Would-Be: A Corollary）」、「友へ——警句に込めて——（To a Friend: An Epigram of Him）」と、矢継ぎ早に辛辣な諷刺詩をしたためている。友人のハウエルとしても、さすがにこれ以上放置しておくことはできなかったのだろう、手紙はジョンソンの諷刺詩が「国王の建築家（royal architect）」ことイニゴー・ジョーンズの名声に泥をかけたことに触れ、単刀直入に自重を促している。

ジョンソンが翌1632年に手がけた喜劇『磁石夫人』では、ウィトロウィウスに言及してイニゴー・ジョーンズを当てこする場面はあるものの（「序幕（Induction）」59-62行）、一連の諷刺詩に見られた激しさはなく、忿怒の矛は

収まったかに見える。ハウエルの手紙が功を奏したのかもしれない。ケンブリッジ版全集を見る限り、以後、イニゴー・ジョーンズに対するあからさまな諷刺が認められるのは、『磁石夫人』の翌年にコックピット座で上演された *Tub* と、その翌年の 1634 年、国王夫妻のダービーシャー行幸に際し、ウィリアム・キャヴェンディッシュのボルソーバー城で行われたエンターテインメント（第 2 版）のみである（Jonson 683-96）。注目したいのは、そのジョンソンが、『磁石夫人』と同じ年の 1632 年、僅か 16 行の短詩ではあるが、後にセントポールスクールの校長となるアレクサンダー・ギル（Alexander Gil）を揶揄する露骨な諷刺詩を書いていることである。ジョンソンの短詩は、『磁石夫人』を「寝たきり老人の愚鈍（bedridden wit）」の産物と酷評したギルの駄句「ベン・ジョンソンの『磁石夫人』について（Upon Ben Jonson's *Magnetic Lady*）」に応酬したものだが（Donaldson 417; Jonson 541-42）、見落とせないのは、ギルの筆がブラックフライアーズ座の客席に陣取っていたイニゴー・ジョーンズとナサニエル・バター（Nathaniel Butter）を引き合いに出し、更に悪意ある詩行を綴っていることである。⁽²⁾

Oh, how thy friend Nat Butter 'gan to melt,
 Whenas the poorness of thy plot he smelt;
 And Inigo with laughter there grew fat
 That there was nothing worth the laughing at.

(Literary Record, Electronic Edition, 15-18, qtd. Ostovich 395)

バターはともかく、芝居を観ていたイニゴー・ジョーンズが出来な芝居を笑い飛ばし、「馬鹿笑いで腹も満腹、肥え太ってしまった」（17 行）という一節は、ジョーンズとの鏝迫り合い敗れ、宮廷を追われて野に下った劇作家にとって耐えがたい屈辱であったに違いない。ジョンソンは即座に短詩でギルに応じ（Jonson 541-42）、返す筆で、劇場版「イニゴー・ジョーンズへの忠告」とも見紛う *Tub* を一気呵成に書き上げたのだろう。*Tub* は『磁石夫人』の上演から僅か半年、1633 年の春には宮廷祝典局長の上演許可を取り付け、コックピ

ット座での上演にこぎつけている。ギルがイニゴー・ジョーンズを持ち出していなければ、恐らく、齢すでに 60 を過ぎ、病床に不自由な身体を横たえるジョンソンは、仇敵に対する積年の恨みを再燃させることなく、従って *Tub* を書き上げることもなく、数年後には 60 余年の生涯を終えていたのではないだろうか。その意味でも、*Tub* は、ジョンソンの根深い私憤から生まれた作品、文字通りエゴのドラマなのである。この曰く付きの芝居は、翌 1634 年の 1 月に宮廷で上演されている。御前上演の運びとなった経緯からしても、恐らく、コックピット座での受けは悪くなかったのではないかと思われる (Happé 545)。

2 In-and-In Medley

Tub は、1633 年 5 月 7 日付けで、宮廷祝典局長ヘンリー・ハーバートの上演許可がおりているが、検閲により、“*Vitru Hoop*” の箇所全でと、桶を使った “motion” の場面を削除するように命ぜられた。イニゴー・ジョーンズから個人的中傷が書き込まれているとの異議申し立てがあり、これを受けての措置であったことが記されている (Happé 545)。検閲の対象となった “*Vitru* [i.e. *Vitruvius*]” はイニゴー・ジョーンズが金科玉条とした古代ローマの建築家、“*Hoop*” は「桶」の意、よって「桶屋のウィトルウィウス」を意味するこの登場人物はイニゴー・ジョーンズへの当てこすりに他ならない。また、“motion” は絡繰り仕掛けを使った舞台装置、すなわち宮廷仮面劇への当てこすりで、これもイニゴー・ジョーンズに当てつけたものである。現存する *Tub* では “*Vitru Hoop*” が In-and-In Medley に書き換えられているが、面当てはかなり明けて透けで、しかも、芝居の終幕には削除を命じられた “motion” の場面も残っており、加えて、第 4 幕には「もぐりの場 (Scene Inter-*loping*)」と呼ばれる件も挿入されている。この内容が初演時の形を反映しているとは思われないが、書誌学的検証により、現在では 1640 年の『全集』に収められたこのテキストが、検閲の影響を最大限払拭した、従って、ジョンソ

ン本来の意図を最も忠実に反映した *Tub* とされている (Happé 546)。

論を進める前に芝居の概要を俯瞰しておこう。舞台はロンドン郊外のミドルセックス、ジョンソンがそれまで書いてきた都市喜劇とは異なり、田舎が舞台のドラマである。筋立ての中心はケンティッシュタウン (Kentish Town) のターフ家とトッテンコート (Totten Court) のタブ家、これにマリボーンの治安判事プレアンプルとセントパンクラス司祭ヒューが関わってくる。郡治安官のターフは聖ヴァレンティンの記念日に娘のオードリーと煉瓦焼き職人のクレイの祝言を挙げるため、仲間の村治安官たちと教会に向かうが、タブ家の長男タブは以前からオードリーに気があったため、ターフを出し抜こうと一計を企てる。ところが、治安判事のプレアンプルも密かにオードリーを狙っており、司祭のヒューを抱き込んだことから、芝居は騙し合いのドタバタ劇に転ずる。肝腎の嫁取りは、タブ家の母親の使用人ボルマーテンが漁夫の利を得て落着、一同全員がタブの屋敷に会して祝宴に興じ、影絵仕立ての絵灯籠——検閲で削除されたはずの “motion” ——を観ながら幕となる。宮廷仮面劇もどきの “motion” は、桶の底をくり抜いて油紙を貼り、蠟燭を利用して人形の影絵を回転させる仕掛けで、安作りの走馬燈のようなものだったと思われる (*Tub*, 第5幕第7場 30-37行; Beaurline 283-85)。

Tub はいわゆる love chase 物の部類に属する笑劇だが、ジョンソンの意匠の中心が、郡治安官ターフに同行する仲間の一人で、終幕の “motion” を一手に引き受ける桶屋の In-and-In Medley にあることは明らかである。In-and-In Medley には「何でも放り込んだゴタ混ぜ」という意味が込められており、宮廷仮面劇——音楽、詩、絵画、衣装、機械仕掛けの絡繰等々、様々な要素を組み合わせた総合舞台芸術——の制作者イニゴー・ジョーンズを当てこすったものだが、この名前には更に捻りの利いた幾つかの修辭的作為が仕掛けられている。Inigo Jones の “Ini-” は、前から読んでも後ろから読んでも 〈in〉であるから、文字通り In-and-In、更に、二人の決別に至った宮廷仮面劇『愛の勝利のカリポリス凱旋』にも刷られているように、Jones はラテン語表記の慣習で Iones と記されたから、ここでも In-and-In の 〈I-n〉が利いてくる。ジ

ジョンソンは露骨な個人攻撃で物議を醸した諷刺詩「イニゴー・ジョーンズへの忠告」でも、この仇敵の名前をもじった諷刺を試みているので、⁽³⁾ *Tub* の *In-and-In* はその続編、棘ある言葉遊びのレトリックであった。

検閲により、予定していた登場人物の一人 Vitru [Vitruvius] Hoop が使えなくなったことは、作劇上のテクニックという点から見れば、むしろ幸いだったかもしれない。ジョンソンが苦肉の策として捻り出した *In-and-In Medley* という名は、ここぞという場面になると、鳴子のごとく 〈in〉を打ち鳴らして、イニゴー・ジョーンズを玩弄し始める。

MEDLEY Indeed there is a woundy luck in names, sirs,
 And a main mystery, an' a man knew where
 To vind it. My godsire's name, I'll tell you,
 Was In-and-In Shittle, and a weaver he was,
 And it did fit his craft: for so his shittle
 Went in and in still, this way, and then that way.
 And he named me In-and-In Medley; which serves
 A joiner's craft, because that we do lay
 Things in and in, in our work. But I am truly
Architectonicus professor, rather,
 That is, as one would zay, an architect.

(4. Scene Interloping, 1-11, 下線筆者)

郡治安官ターフの仲間の田舎者たちが、様々な名前の由来について奇想天外な蘊蓄を語り合う場面である。自身の名前の由来を得意げに語る *In-and-In Medley* の台詞には、〈in〉の音が執拗に刻まれているが、“joiner (建具屋)” (8行) の “jo-” と “-in-” も、*Inigo Jones* を当てこする語呂合わせになっている。台詞は、更に、イニゴー・ジョーンズの父親が貧しい織工だったことにも言い及び (3-6行)、機織道具の「杼 (shuttle)」を、「大便 (shit)」を連想させる “Shittle/ shittle” (4, 5行) と訛らせて畳みかけている。もったいぶったラテン語で自称「建築学教授 (*Architectonicus professor*)」(10行) を名

乗らせ、ジョーンズの尊大な態度を揶揄して終わるこの台詞は、ジョンソンの私憤のレトリックが成せる技である。

ジョンソンは **In-and-In** を自在かつ周到に変奏させ、思いもよらぬ場面でイニゴー・ジョーンズに痛棒を食らわすことにも抜かりなかった。

CLAY No, as I am a kyrsin soul, would I were hanged

If ever I——Alas! I would I were out

Of my life ; so I would I were, and in again——

PUPPY NAY, Mistress Audrey will say nay to that.

No in-and-out? An' you were out o'your life,

How should she do for a husband? Who should fall

Aboard o'her then? (2. 2. 148-54, 下線筆者)

オードリーの婿に迎えるはずだったクレイに追い剥ぎの嫌疑がかかり、教会に向かっていた郡治安官ターフーの計画が破綻する場面である。“kyrsin” (148行) は **Christian** の訛りで、クレイは「キリスト教徒の魂にかけて」無実だと訴えるのだが、“kyrsin” の“-in” に導かれて、パピーの慰めは“in” と“out” の卑猥な冗談に転調する。「死んでしまいたい (were out)」, 生まれ変わってこの世に「戻ってきたい (in again)」と弱気なクレイ (149-50行) に、パピーは「入ったり出たり (in-and-out)」も無しで「あの世に行ってしまう (out o'your life)」なんて、オードリーさんが納得しない、と返している (151-52行)。“in-and-out” (152行) はそのものずばり、男女の交わりをあらさまに含意するから、**In-and-In Medley** ことイニゴー・ジョーンズは、わずか数行の言葉遊びで、あろうことか、人間男性器にまで貶められてしまうのだ。劇作家にして詩人ジョンソンの筆は良くも悪くも筋金入りで、敵に回すと厄介な男なのである。

Tub には **In-and-In** の言葉遊びが執拗に、かつ周到に書き込まれているが、ジョンソンはそこに自身の存在を刻印しておくことも忘れなかった。

TUB Can any man make a masque here i'this company?

TO-PAN A masque! What's that?

SCRIBEN A mumming, or a show,
With vizards and fine clothes.

CLENCH A disguise, neighbour,
Is the true word. There stands the man can do't, sir :
Medley the joiner, In-and-In of Islington,
The only man at a disguise in Middlesex.

TUB But who shall write it?

HILTS Scriben, the great writer.

SCRIBEN He'll do't alone, sir ; he will join with no man,
Though he be a joiner. In design, he calls it,
He must be sole inventor. In-and-In
Draws with no other in's project, he'll tell you ;
It cannot else be feazible, or conduce ;
Those are his ruling words! (5. 2. 28-40, 下線筆者)

タブが終幕の仮面劇を準備する件だが。ターフの仲間の馬蹄職人で村治安官のクレンチによれば、ミドルセックスでこれができるのは In-and-In Medley ただ一人しかいないという (31-33 行)。すでに見たように、テキストからは Inigo Jones の <in>, <-in>, <jo-> が聞こえてくるのだが、更にこの件には、“design (立案設計)”, “project (事業)”, “feazible (実現可能)”, “conduce (遂行可能)” といったジョーンズ一流のジャーゴンまで散りばめられている。注目したいのは、誰が台詞を書くのだと問うタブに、タブの家庭教師ヒルツがすかさず「文豪のスクライベンです」(34 行) と答えていることである。名は人なりで、“Scriben (スクライベン)” は他ならぬ「ベン (Ben)」その人、Ben Jonson が素の顔を現した場面と言えよう。In-and-In Medley は独占欲の塊りで、「自分一人が作者 (inventor) でなければ気の済まぬ輩だ」(37 行) と切り捨てるスクライベンの台詞には、宮廷仮面劇『愛の勝利のカリポリス凱旋』の「作者」を巡ってイニゴー・ジョーンズと袂を分かち、宮廷を追われた

ジョンソンの忸怩たる思いが込められていたに違いない。ジョーンズとの確執は元を正せば「作者」の問題に起因する訳で、この一点を譲らぬジョンソンの執念は、第5幕第7場、「立案設計」を巡る In-and-In Medley とタブのやり取りにも刻印されている。

MEDLEY I have a little knowledge in design,

Which I can vary, sir, to infinito.

TUB *Ad infinitum*, sir, you mean.

MEDLEY I do :

I stand not on my Latin, I'll invent,

But I must be alone then, joined with no man.

This we do call the stand-still of our work.

TUB Who are those 'we' you now joined to yourself?

MEDLEY I mean myself still, in the plural number,

And out of this we raise our *Tale of a Tub*.

TUB No, Master In-and-In, my *Tale of a Tub*.

By your leave, I am Tub : the tale's of me

And my adventures! I am Squire Tub,

Subjectum fabulae.

MEDLEY But I, the author.

(5. 7. 10-22, 下線筆者)

引用冒頭、「立案設計 (design)」には心得があるので、それを如何様にも「様々と共に (*infinito*)」変えることが出来るという In-and-In Medley に対し、タブがラテン語の誤用を指摘し、「様々に (*Ad infinitum*)」と修正すると、In-and-In Medley は、自分はラテン語も「創作するのだ (*invent*)」と我を通して譲らない。⁽⁴⁾ 諷刺詩「イニゴー・ジョーンズへの忠告」の中に「似非ウィトロウィウスを振りかざし」(8行)という一節があったことも想起すべき箇所である。イニゴー・ジョーンズはラテン語が堪能ではなく、ウィトロウィウスもバルバロ版のイタリア語訳で読んでいた (“An Expostulation,” l. 8

n.)。一方、ジョンソンは言うまでもなくラテン語の原典で読んでいる (Orgel 86; McPherson 97)。ジョンソンはそうした経緯にも言及しながら、「創作するのだ (invent)」と主張して引かぬ In-and-In Medley の厚顔無恥を諷し、「作者 (inventor)」然として憚らぬイニゴー・ジョーンズへの一矢としたのである。上のやり取りには、仮面劇「タブさんの話 (たわいない話)」は「予の (our)」話だ、⁽⁵⁾「作者 (author) は私だ」(22 行) と主張して譲らぬ In-and-In Medley の独占欲も書き込まれており、*Tub* を書かしたジョンソンの私憤が、詰まるところこの一点に収斂することを物語っている (Orgel 78-96)。蓋し「作者」である。

ところで、*Tub* のタイトルページには、ローマの詩人カトゥルス (Valerius Catullus) からの一節が題辞として印刷されている。曰く、この同じ男が詩を書くと「野暮ったいド田舎より更に野暮ったい (*Inficeto est inficetior rure*)」。題辞で省略されている「この同じ男 (idem)」とは、実力以上の過大評価でもてはやされたローマの三文詩人スフェュヌス (Suffenus) のことである (Jonson 555, n.7)。イニゴー・ジョーンズは In-and-In の言葉遊び——詩人の武器——で鬨りものにされ、「たわいない話 (タブさんの話)」と題する仮面劇もどきの「作者」にされた上に、*Tub* の題辞として印されたカトゥルスの詩行によって〈身の程知らずのヘボ詩人〉の烙印を押されながら、『たわいない話』と題する一篇の諷刺劇の中に封印されるのである。イニゴー・ジョーンズは、入れ子細工のように組み立てられた周到な仕掛けの中で、逃げ場のない comic butt を演ずるしかない。私憤のドラマここに極まるといったところだろうか。

3 治安判事プレアンブル

マーティン・バトラー (Martin Butler) によれば、*Tub* の筋立てには、王権を拠り所とする中央集権国家と地方行政、地方共同体の間に生じていたギャップと軋轢が活写されており、それを体現する象徴的キャラクターがケンティ

ッシュタウンの郡治安官ターフであるという (“Stuart Politics”)。バトラーの説く中央政府と地方行政の対立軸を念頭におくと、*Tub* の劇世界と、これを取り巻くジョンソンとイニゴー・ジョーンズの関係も、〈中心〉と〈周縁〉という視点から捉え直すことができるように思われる。たとえば、英国建築総監督官として、また、宮廷仮面劇の制作者として王が重用するイニゴー・ジョーンズは〈宮廷（コート）／中心〉に、野に下って *Tub* を創作するジョンソンは〈コックピット座（タウン）／周縁〉に立つ存在と言えるだろう (Beaurline 276)。一方、ロンドン郊外を舞台とする *Tub* は、ミッドルセックスの〈周縁〉に繰り広げられる笑劇だが、劇中のこの〈周縁〉世界には、タブのトッテンコートと、郡治安官ターフのケンティッシュタウンが存在し、イニゴー・ジョーンズの〈宮廷（コート）／中心〉とジョンソンの〈タウン／周縁〉を類比的に再現している。

そうした視点から郡治安官ターフを読み直してみると、*Tub* に書き込まれた今ひとつの私憤のドラマが見えてくる。*Tub* のドタバタ劇は、一人娘オードリーの取り合いに巻き込まれ、動きの取れなくなった郡治安官ターフを軸に展開していくが、愛娘の拳式を後に回し、犯人（実はでっち上げられた虚言）逮捕を優先させなければならないターフは、治安官を務めるくらいなら「村の掃除夫にでも選出されて、シャベル片手に街道の掃除をしている方がましだ」（第3幕第1場 4-6行）と嘆き、重荷に耐えきれなくなったロバを引き合いに出しながら「何もかも放っぱり出してやる・・・郡治安官などやってられるか」（第3幕第3場 18-23行）と、遣り場のない憤懣をぶちまけている。ターフの悲憤慷慨には、チャールズ治政下で厳しさを増す政治的締め付けと、これに対応しきれない地方の実態が映し出されていると指摘するバトラーは、様々なレヴェルの社会的分裂が終幕の絵灯籠（影絵の仮面劇）に回収され、⁽⁶⁾ 共同体の一体感、連帯感を喚起して終わるところに、*Tub* の喜劇的ヴィジョンとジョンソンの政治的主張が込められていると総括している (“Stuart Politics” ; Marcus 133-34 ; Beaurline 285-87)。そうだろうか。祝祭喜劇の枠を踏まえた議論としては理解できない訳ではないが、どこか釈然としない思いが

残るのである。*Tub* の筋立ては、騙し合いに巻き込まれ、その度に繰り延べられるオードリーの祝言と父親ターフの悲憤を中心に展開していくが、見落とせないのは、ドタバタの発端から最後まで、陰に陽に姿を現し、この律儀な父親にして郡治安官でもあるターフを悩まし続ける治安判事プレアンプルの存在である。たとえば、第2幕第2場、タブの家庭教師ヒルツは、治安判事の影をチラつかせて、ターフに職務の遂行を迫っている。

TURF . . . Just at this time too, now
 My daughter is to be married! I'll but go
 To Pancridge church hard by, and return instantly,
 And all my neighbourhood shall go about it.
 HILTS Tut, Pancridge me no Pancridge! If you let it
 Slip, you will answer it, an' your cap be of wool ;
 Therefore take heed, you'll feel the smart else, Constable.

 I am to go to the next justice of peace,
 To get a warrant to raise hue and cry, . . .

(2. 2. 102-64)

ターフは、パンクリッジ（セントパンクラス）の教会で娘の挙式を済ませて戻ってくるまで待ってもらえないかと懇請するが、ヒルツは治安官としての職務を優先するように迫り、「すぐその治安判事（プレアンプル）のところへ行くとところだ、叫喚追跡（hue and cry）の職務執行札状を書いてもらわねえとな」（63-64行）と、ダメ押しの脅し文句を繰り出すのである。叫喚追跡は共同体に課せられた犯罪人追跡・逮捕の義務で、郡治安官は職務上その先頭に立つことが求められていた（*Tub*, 2. 2. 94 n. ; Baker 503 ; 松村 341）。錯綜した騙し合いが最後の局面にさしかかる場面でも、ターフを窮地に追い込むのは治安判事プレアンプルの存在である。

HUGH No sooner had I got my wounds bound up,
 But with much pain I went to the next justice,
 One Master Bramble [i. e. Preamble], here at Maribone :
 And here a warrant is, which he hath directed
 For you, one Turf—if your name be Toby Turf—
 Who have let fall, they say, the hue and cry.
 And you shall answer it afore the Justice.

.....

Why do you dally, you damned russet coat?
 You peasant, nay, you clown, you constable!
 See that you bring forth the suspected party,
 Or by mine honour—which I won in field—
 I'll make you pay for it afore the Justice.

(3. 9. 18-36)

辻強盗の被害者キャプテン・サムを装う司祭のヒューは、傷の手当てをするとすぐに治安判事プレアンプルの許に行き、令状を出してもらったと嘯きながら、「あんたは叫喚追跡を放り出したそうじゃないか、治安判事さんの前できっちり償ってもらおうよ」(23-24 行)と迫り、⁽⁷⁾「治安判事さんの前で、きっちり料金を払わせるからな」(36 行)と捨て台詞を残して去って行く。板挟みのターフは地方行政を担う小役人の無能ぶりを写しており、中央集権国家の統治が一枚岩の秩序を形成し得なかったことへの批判ともなりうるのだが (Butler, “Stuart Politics”), ジョンソンの意図は少し違うところにあったのではないだろうか。ジョンソンは治安維持を担う役人の職務を細かく書き分けながら *Tub* の筋立てを構想しており、その狙いはターフとプレアンプルの関係にも反映されている (Sanders 164-79)。治安判事は枢密院によって任命され、地方行政の要としての権力と職能を有する役人であり、一方、郡治安官は土地の共同体から選出され、治安判事はその選任権を掌握する小役人であった (Baker 23-26; 松村 165, 383)。同じ役人とはいえ、郡治安官ターフは〈タウン／周縁〉を、治安判事プレアンプルはミドルセックスの周縁にしながら〈宮

廷／中心〉に繋がる人物として書き込まれているのだ。ジョンソンの筆は、ターフとプレアンプルの間に、職務上抗えぬ上下関係があることを示唆しながら、悩めるターフを筋立ての中心に据えたのである。ここで見落とせないのがイニゴー・ジョーンズの存在である。正確な創作年と初演の年は不明だが、*Tub* と前後する時期（恐らく 1632 年）に『コヴェントガーデンの草取り、あるいはミドルセックスの治安判事（*The Weeding of the Covent Garden, or the Middlesex Justice of Peace*）』と題する喜劇が書かれている。作者は自他共にジョンソンの愛弟子を任じ、『バーソロミューの市（*Bartholomew Fair*）』の舞台にも立ったリチャード・ブルーム（Richard Brome）で、作品の副題にある「ミドルセックスの治安判事」は他ならぬイニゴー・ジョーンズのことである（Leapman 228）。見過ごされがちだが、当時、イニゴー・ジョーンズはウェストミンスターとミドルセックス（すなわち、他ならぬ *Tub* の劇世界）の治安判事を務めていた（Leapman 221, 228）。ブルームはイニゴー・ジョーンズとの確執で宮廷を追われたジョンソンを援護すべく、チャールズの寵愛を独占する治安判事ジョーンズに諷刺の矢を放ったのである（Marcus 132-34）。⁽⁸⁾ 悪徳治安判事プレアンプルの暗躍を執拗に書き込むジョンソンの筆は、〈宮廷／中心〉への失意と未練を鬱積させながら、治安判事ジョーンズに向けられた意趣返しの一矢でもあった。⁽⁹⁾ その劇作活動を締め括る私憤のドラマは、軋み始めた〈タウン／周縁〉と〈宮廷／中心〉のドラマを宿して、いささか物騒な情動のドラマを出現させていたのではないだろうか。

お わ り に

Tub はコックピット座での初演の翌年、1634 年の 1 月に御前上演をみているが、ひと言「不評だった（not lyk'd）」との記録が残るだけである。実際どのような内容の芝居であったか、また、不評の背景に何があったかは定かでないが（Happé 545-46; Astington 183）、⁽¹⁰⁾ 上に見てきたように、イニゴー・ジョーンズに対する私憤のドラマは、その底に宮廷に対する批判を孕ん

であり、諷刺の一矢はチャールズにも届いていた可能性がある。ジョンソンは *Tub* 冒頭のプロローグで「国家のこととか、政治結社とか、そんなものは我々のこの桶（a tub）の話（たわいない話）には、一切関係ありません」（1-2 行）と語りかけ、「ここにお見せするのは、田舎者たちの粗末な小屋（cotes）と、王様たちの立派な宮廷（courts）を隔てる、違いの数々です」（11-12 行）と訴えてはいる。だが、17 世紀ステュアート朝の歴史を繙けば明らかのように、また、ジョンソンの語呂合わせが示唆しているように、田舎者の粗末な〈コウト（cote）〉と王の〈コート（court）〉を隔てているのは、時のひと弾みで容易に越境し得る差異でしかなかった。*Tub* には革命のエトスに通ずる不満の因子が潜伏していたと言えよう。とすれば、*Tub* の劇世界における時代設定の曖昧さを、ジョンソンの筆や構想の乱れに帰するのは早計に過ぎると言わねばならない。なるほど、*Tub* には劇中の時代を推定させる歴代君主の名が、古くはエドワード 6 世から、ヘンリー 7 世、8 世を経て、女王メアリー、エリザベスに至るまで、広汎に互って書き込まれており、具体的にいつの時代を想定した話なのか、劇作家の意匠は判然としない。⁽¹¹⁾ だが、『作品集』（1640 年、没後出版）への収録を念頭に、最後まで、*Tub* に推敲の筆を入れていたと思われるジョンソンが（Happé 546）、劇中、直接間接に 10 箇所を優に超える時代設定の不整合を見落としていたとは考えにくい（Happé 549-50）。その筆は、イニゴー・ジョーンズへの私憤が宮廷批判に通ずることを承知の上で、政治との没交渉を *Tub* 冒頭のプロローグにしたため、更に、護身のためのカムフラージュとして、時代設定をぼかすための目眩ましを、敢えて劇中に仕掛けたのではないだろうか。周知のように、ジョンソンは火薬陰謀事件に深く関わっており、「二枚舌（equivocation）」の巧妙な詐術とも無縁ではなかった（Shapiro 76, 114, 226-32; Donaldson 216-34, 281-341）。そのような文脈で眺めたとき、取り分け興味深いのは、終幕の仮面劇（絵灯籠）の直前、第 5 幕第 6 場を結ぶタブの台詞である。

TUB I must confer with Master In-and-In

About some alterations in my masque.

.....

... I'll have such a night

Shall make the name of Totten Court immortal,

And be recorded to posterity.

(5. 6. 22-27)

タブは *In-and-In Medley* の仮面劇に自ら手を入れ、「タブさんの話（たわいない話）」を用意して、祝宴の一夜を演出しようとしている。最後の3行、凄惨な夜にしてやるぞ、トッテンコートの名に永遠の命を吹き込み、記録して、末永く孫子の代まで伝えるのだというタブの台詞は、劇壇から消えていくジョンソンが、去り際に遺した締め口上のようにも見えてくる。*Tub* を完成させたジョンソンは、後足で砂を掛けるようにして野に下った。その私憤が紡ぎ出した痛烈な諷刺劇は、チャールズとイニゴー・ジョーンズの宮廷（court）が歴史の荒波の中に潰え去った後も、*Tub* のトッテンコートとして命を吹き込まれ、文字通り、今、最新のケンブリッジ版全集に「記録（recorded）」されて、遠い孫子の代の我々に読み継がれているとは言えないだろうか。

*本論は関西シェイクスピア研究会2月例会（2018年2月25日）での口頭発表に加筆修正を施したものである。

注

- (1) ジョンソンは *A Tale of a Tub* の後に *The Sad Shepherd* と題する芝居を書きかけたが、未完の断片に終わっている。拙論は *A Tale of a Tub* を以ってジョンソン最後の劇作品とする立場をとる。なお、拙論におけるジョンソンからの引用と作品タイトルへの言及は David Bevington 他編の Cambridge 版全集に拠る。
- (2) ジョンソンは仮面劇 *Time Vindicated to Himself and to his Honours* (1623) の中でアレクサンダー・ギルの父親を、また、*The Staple of News* (1626) の中で草創期の新聞販売に関わったナサニエル・バターを諷刺した (Donaldson 417)。ケンブリッジ版全集は、ジョンソンの諷刺がアレクサンダー・ギル当人に向けられたものか、同姓同名の父親に向けられたものであったかの同定はしていないが (Jonson 541, n.), いずれにせよ、ギルの『磁石夫人』攻撃には、過去の

経緯があった。

- (3) 〈as Inigo〉とも読める本詩の“asinigo” (20 行) は、スペイン語で“little ass (小さなロバ／馬鹿)”を意味する“asinico”にかけてあり、オリジナルの手稿本の中では更に露骨に“Ass-Inigo (馬鹿イニゴー)”と綴られている。また、同じ詩 22 行目の“Inigo”は、前後の文脈から、ラテン語で「悪党」を意味する“iniquo”にかけてであると思われる (Jonson 376, l. 20 n., l. 22 n.)。
- (4) “infinito”と“infinitum”の“-fin-”は共に長母音だが、どちらの単語もアクセントが penultimate にあるので、短母音に近い発音で〈in〉音を強調することが可能である。
- (5) タブが問い正しているように (16 行), In-and-In Medley は一人称単数に royal we を使っている。王様気取りの In-and-In Medley は、この箇所でも所有格に“my”ではなく royal we の“our”を使う。
- (6) チャールズと議会の対立、王の強硬な政策と地方行政の乖離齟齬は、民衆の不満を鬱積させ、清教徒革命に至る精神風土を醸成しながら、共同体社会の中に様々なレヴェルの分裂を生み出していた (Butler, *The Stuart Court* 276-357; Cressy 84-119)。
- (7) 地方行政を担う役人の職務怠慢や義務の放棄は頻繁に起きていて、ターフを彷彿させる叫喚追跡不履行の記録も残っている (Cressy 114-17)。
- (8) イニゴー・ジョーンズは第 4 代ベッドフォード伯の要請でコヴェントガーデンを設計しており、この喜劇とは因縁浅からぬものがあった。「ミドルセックスの治安判事」という副題そのものは芝居の内容にほとんど反映されていないが、劇中にはイニゴー・ジョーンズに対する当てこすりが顕著に認められる (Shaw 75-79)。
- (9) ジョンソンは「イニゴー・ジョーンズへの忠告」中で「治安判事ジョーンズ (Justice Jones)」(16 行) に言及し、更に、オーヴァードゥー (『パースロミューの市』で嘲弄的となる治安判事) を引き合いに出しながら、治安判事の任にあったジョーンズを諷している (75-80 行)。
- (10) Leapman は、1634 年の御前上演を観たイニゴー・ジョーンズが激怒し、王に訴えて以後の上演を禁止させたとしているが (250), 論拠のない推論である。いずれにせよ, *Tub* の上演に関しては、コックピット座での初演 (1633 年) と、この御前上演の記録しか残っていない。
- (11) 第 1 幕第 5 場には、国王伝令官の外衣に印されていた紋章の盾持ち (supporters) が、竜とグレイハウンドだったという一節がある (36-38 行)。竜と猟犬の盾持ちはヘンリー 7 世の紋章に使われ、ヘンリー 8 世も治世の前半まで使用していた。他に、ヘンリー 8 世の時代からエリザベスの治世前半まで存命し、宮廷の余興とも関係の深かった John Heywood への言及もある (第 5 幕第 2 場 74

行)。L. S. Marcus は *Tub* を擬似的エリザベス朝祝祭喜劇とし、それがメアリー一世下の時代設定の中に書き込まれているとして、これを「二重にアナクロニスティック」な芝居であると論じている (133)。

参考文献

- Astington, John H. *English Court Theatre, 1558-1642*. Cambridge UP, 1999.
- Baker, J. H. *An Introduction to English Legal History*. 4th ed., Oxford UP, 2007.
- Barton, Anne. *Ben Jonson, Dramatist*. Cambridge UP, 1984.
- Beaurline, L. A. *Jonson and Elizabethan Comedy: Essays in Dramatic Rhetoric*. Huntington Library, 1978.
- Boehrer, Bruce. *Environmental Degradation in Jacobean Drama*. Cambridge UP, 2013.
- Butler, Martin. "Stuart Politics in Jonson's *Tale of a Tub*." *Modern Language Review*, vol.85, no.1, January 1990, pp.12-28.
- . *The Stuart Court Masque and Political Culture*. Cambridge UP, 2008.
- Cressy, David. *Charles I and the People of England*. Oxford UP, 2015.
- Donaldson, Ian. *Ben Jonson: A Life*. Oxford UP, 2011.
- Dryden, John. "An Essay of Dramatic Poesy." *English Critical Texts: 16th Century to 20th Century*, edited by D. J. Enright and Ernst de Chickera, Oxford UP, 1975, pp.50-110.
- Evans, Robert C. "Jonson's Critical Heritage." Harp and Stewart, pp.188-201.
- Happé, Peter. "Introduction" to *A Tale of a Tub*. Jonson, pp.545-53.
- Harp, Richard and Stanley Stewart, eds. *The Cambridge Companion to Ben Jonson*. Cambridge UP, 2000.
- Jonson, Ben. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. Edited by David Bevington et al., vol.6, Cambridge UP, 2012.
- Knowles, James. "Introduction" to *Love's Triumph through Callipolis*. Jonson, pp.321-31.
- Leapman, Michael. *Inigo: The Troubled Life of Inigo Jones, Architect of the English Renaissance*. Review, 2003.
- Marcus, Leah. S. *The Politics of Mirth*. U of Chicago P, 1986.
- McPherson, David. "Ben Jonson's Library and Marginalia: An Annotated Catalogue." *Studies in Philology*, vol. LXXI, no.5, December 1974.
- Orgel, Stephen, ed. *The Renaissance Imagination: Essays and Lectures by D. J. Gordon*. U of California P, 1975.
- Ostovich, Helen. "Introduction" to *The Magnetic Lady, or Humours Reconiled*.

Jonson, pp.393-411.

Sanders, Julie. *Ben Jonson's Theatrical Republics*. Palgrave, 1998.

Shapiro, James. *1606: William Shakespeare and the Year of Lear*. Faber and Faber, 2015.

Shaw, Catherine. *Richard Brome*. Twayne Publishers, 1980.

松村赳・富田虎男 編著『英米史辞典』研究社, 2000.

——文学部教授——